

自分で考え、自分で選び、自ら行動できる子を育てる ～見守る保育～

社会福祉法人根っこの会

長坂保育園

(青森県八戸市)

■保育所基礎データ
定員120名、園長1名、副園長1名、主任保育士1名、保育士20名、栄養士1名、調理員2名、看護師1名



長坂保育園は、青森県の南東部、太平洋に臨む八戸市内にある。社会福祉法人根っこの会により、昭和53年に定員90名で創設された。

園の保育目標は、子どもたちが「自分で考え、自分で選び、自ら行動できる子」。子どもが一人ひとりの個性、発達段階、興味や意欲、その日の体調などに応じて、自発的、意欲的にかかわることができる環境をつくり、子ども自身が主体的に選んで活動することを大切に「見守る保育」を実践している。

カテゴリーⅣ 子どもの育ちを保障する

- アクション1 質の高い保育について研究をすすめ、実践につなげます。
- アクション2 利用者の個別のニーズに対応したきめ細かな保育を提供します。

サッカーを通じた体力・健康づくり-勝負が子どものころと体を育てる

長坂保育園の特徴的な取り組みのひとつに、サッカーを通じた子どもの体力、健康づくりがある。「22年前、地域の4園の園長が集まってサッカーをしようという話があり、それなら参加してみようという気持ちで始めたのがきっかけです」と語るのは川口園長。「そのときは1点もとれずに最下位でした。自分はそれでもいいかな、と思ったのですが、子どもたちがぐちゃぐちゃ泣いている姿を見て、勝つ喜びを味わわせたい、と徐々に熱が入っていきました。5年目に初めて優勝したときには子どもだけでなく保護者も大喜びでしたが、まさか、ここまで盛り上がると思いませんでした。」

現在は年に2回、大きなサッカー大会が開催されるようになった。参加園数は20チームに増え、大会の際には地域の方々も含め1,000人以上が集まるほどになっている。父兄が子どもたちにサッカーを教えてくれるなど、保護者のバックアップが大きなエネルギーとなり、子ども、職員、保護者の関係が強まって、園全体が盛り上がるようになってきたという。「保護者はサッカーの応援団から、保育所全体の応援団になってくれています。また、地域の人の子どもたちへの関心も高まって、地域をまきこんだ取り組みになっていると感じています。」と川口園長。

サッカーが子どもたちにもたらしている影響も大きい。「園の中では負けなしの子どもも、他の園との試合では思うようにプレーできないこともあります。大会後にはくやしさをバネに練習に励む、一回り成長した子どもたちの姿がみられます。今の子どもたちは勝負することが少なくなっていますが、「くやし泣く」、わたしたちはそこを大切に、成長につながるように



●サッカー大会



工夫をしています。」

サッカー大会に参加するのは3歳から。試合に参加した3歳児がくやしさを体感して、「次こそは」と自ら取り組むようになり、自然と継続した取り組みになっている。「サッカーが好きでない子どももちろんいますが、同じ目標、同じ時間を共有することで得られることがたくさんあります。」

人と人との出会いはあいさつから～20年以上続くあいさつ運動

また、園では、「あいさつ」を保育目標の一つに掲げており、子どもたちのお当番活動として「あいさつ当番」がある。3歳児以上のすべての子が交替で当番をし、朝、保育所の玄関で、友だちや保護者に大きな声で「おはようございます」と声かけをする、もう20年以上続く取り組みである。初めはなかなか子どもたちの声が出なかったが、保育士が紙のタスキをつくりあいさつ運動を始めたところ、これが評判になった。

園児のおじいさんから立派なタスキを贈呈され、タスキをかけられることはあいさつ当番の特典となった。今でも子どもたちにとって人気の的になっている。

「あいさつ運動によってもっとも変わったのは保護者です。それまでは、私や保育士があいさつをしても、保護者は子どもに「先生におはようございますは?」と促すだけでしたが、子どもがあいさつすることによって、保護者も自然に笑顔で「おはよう」

と言うようになりました。子どもの力は大きいと感じています。」と園長は語る。

あいさつ運動は地域の町内会の取り組みにも広がっている。毎年9月は、地区連合町内会とタイアップしてあいさつ運動を推進しており、毎週木曜日は「あいさつ運動」の日として、保育士は交替で街角に、あいさつ当番の子どもたちは園の門の前に立ち、元気にあいさつをしている。

セミバイキング方式の給食-子どもの主体性を育む

セミバイキング方式の給食は、園が推進する「見守る保育」の実践のひとつである。食べたいものだけを食べるバイキング方式とは異なり、メニューは決まっているが、量を多くしたり、少なくしたりできるというものだ。「私にも好き嫌いがありますし、体調や気分、家でケンカをした、といったことで食べられない日もありますから。」と園長。

「驚くことに、もやしが嫌いでも最初は1本だけ食べていたのが、卒園する頃には、他の子どもたちと同じようにもりもり食べられるようになった子どもがいました。『少しでも食べられた』という自信から、自然と食べられるようになっていくのです。」と語るのは畑主任保育士。



●畑まるみ主任保育士

3歳児以上はホールをランチルームにして食事をする。子どもたちはトレーの上に自分で食器を並べ、3～5歳児が担当する給食当番と調理員、保育士に配膳してもらう。給食当番の子どもたちから、「1個ですか?2個ですか?」「多めですか?少なめですか?」という声が聞こえる。それに「2個をお願いします」「少なめをお願いします」と答える声。自分で食べられる量をきちんと言葉できちんと伝える。「そうすることで、1日1回は必ず会話が生まれ、自分の意思を伝えなければならない場ができます。また、数を聞いたり、答えたりする中で、数に興味をもって学ぶなど、生活を通して教育を取り入れているのです。」と園長。

お昼を食べ始める時間、食べ終わる時間は一斉ではない。早く食べ終わった子は違うスペースで遊ぶことができるなど、各自が自分のペースで過ごすことができるようになっている。これも、子ども一人ひとりの生活リズムや主体性を大切にする取り組みのひとつだ。

食育にも特色がある。給食当番は「味見隊」として給食の前に味見ができるという特権があり、この場を通して、調理員が食材や栄養、生産地、作り方などを子どもたちに伝えている。また、配膳の際の子どもとのかかわりから、調理員は一人ひとりが食べる量や好き嫌いをすべて把握し、献立づくりに活かしている。

食材は地産地消で、園の畑でも野菜やいもを栽培している。秋には園長が企画するきのこ汁会や、主任保育士がリードする干し柿づくりなどがある。きのこ汁会は、当初は保護者から食中毒を心配する声があったのだが、今では、保護者がきのこを持って来たり、「このきのこは食べられますか?」と鑑定を依頼されることもあるのだという。「きのこのことが家庭で話題になっているということなので、それが一番うれしいですね」と園長。

このような日常の保育については毎月の園だよりで紹介したり、イベントのたびに作成する「かわら版」、ホームページなど、情報発信にも力を入れている。「保育所はたくさんいい取り組みを積み重ねているのに、そのPRが足りないと感じています。保育所の思いや取り組みを世の中にしっかり伝えていきたいと思っています。」



●川口司園長



●バイキング